

在 外 研 修 報 告

今回のインドネシア訪問の目的の一つは、同国の木造建築、とくに伝統的な民家の保存状況および構造形式の調査を行い、日本の伝統的な民家との関連性を把握することにあった。

訪問先はスマトラ・ジャワ・バリ・ロンボク・スンバワ・スンパの各島で、日程の作成・現地での案内などインドネシア教育文化省の全面的な協力を得ることができた。

インドネシアは2,000余の島々と、250程の部族、回教・キリスト教・ヒンドゥー教などの宗教も多様で、伝統的な民家については、部族ごとに異なった多彩な建築形式をもつ。17世紀頃には国力が増強し、各部族長に権力が集中した結果、首長の家の巨大化あるいは装飾化が進み、現在のような民族的な建築様式が確立したとされる。しかし、この民族的な装いを取除くと、同一の部族では首長の家も、小民家も構造形式は同じで簡素である。各部族の民家の構造形式を分類すると10種類にもなるかどうか。さらに、構造形式の発展段階を追い求めると数種類に集約できるのではないかと思われる。

東スンバワの少数山岳民族の集落に於ては、70年程前の火災で焼け残った2棟の民家が伝統保持のために村民の総意で保存されている。東スンバワのピマ族の住居は2階建ての高床形式であるが、ロンゴ族の伝統的な住居は屋根裏を居住空間に利用した高床建物である。床は4本の柱で支え、柱頭部分には鼠返しの円盤を取付けている。室内は2室に間仕切って奥に米倉、表側に寝間と台所を設ける。

バリ島やロンボク島の米倉はロンゴ族の住居とほぼ同形式の屋根倉である。スンパ島の住居は4本柱の4周に廂を加えて2階建てとし、屋根裏を米倉に利用した高床住居で、ロンゴ族、バリ・ロンボクの屋根倉と同一系統に属する。柱上の鼠返しは日本の弥生時代の高床倉に使われ、屋根倉形式は弥生～古墳時代の西日本の高床倉庫として広く分布していた形式である。

西スマトラ・西スンバワの高床住居は、側柱だけでなく屋内にも柱を立てる総柱の形式をもつ。二階の天井桁、あるいは母屋桁、棟木まで柱をたち上げる形式は、近年発見された和歌山県鳴滝遺跡（6世紀前）の高床倉庫群との関連性を想起させる。さらに、北スマトラのバタック族の高床住居の側柱の床下部分を貫て固める手法も古墳時代にみることができる。その他、平らな桁の形状や、柱上の桷で棟木や桁を受け、桷、桷、蔓草で材と材を接合する方法など、日本の古代建築と共通する点のあまりに多いことに驚くばかりで、稲作文化を共有する日本とインドネシア両国および東南アジア諸国全体の深いつながりを思わずにはいられない。

今回の在外研修では民家を中心にした調査以外に、各地の文化財保存行政についてもその実態を見て廻ることができた。民家の保存は部族長の民家以外は積極的な保存の対象にはなっていないことにやや危惧を感じ、また、回教寺院やヒンドゥー寺院の木造建築の修理は数年前に始まったばかりで、蟻害の処理、彩色・レリーフの保存と復原などの問題で日本の修理技術の援助、とくに技術者の経験交流が望まれる。

(宮本長二郎)